

全学共通教育についての自己点検・評価報告書(教育部会用)

教育部会名:外国語第 I(英語)教育部会

部会長名:瓜田澄夫

作成者名:瓜田澄夫

概要(2930字)

1. 実施体制について

平成21年3月現在、外国語第 I(英語)教育部会に所属する教員は、文学部 3 名、国際文化学部20名、国際コミュニケーションセンター11名、海事科学部1名の計35名である。職名の内訳は、教授17名、特任教授1名、准教授13名、特任准教授4名である。

部会には部会長1名と3名の幹事がおかれ、3名の幹事がそれぞれ委員長を務める、教務委員会・総務委員会・予算/メディア委員会の3つの委員会(委員は幹事を除いて各2名ずつ)が設けられている。年間を通じて、適宜、部会全体会議や幹事会、各委員会を開催して、部会運営に当たり、また部会がかかえる諸問題に対処している。会議を開催する必要がないほどの議事の場合は、幹事会や委員会で解決し、または全体の部会会議をメール会議で行っている。部会長および幹事は、毎年部会での選挙により選出し、委員の選出は部会名簿にもとづき、アイウエオ順でのローテーション制を導入している。

2. 開講科目・実施状況について:カリキュラムや単位認定制度について

2-1. カリキュラム:

平成18年度に当部会も、他の部会と同様に、大幅なカリキュラム改正を行い、本年度で3年目を終了しようとしている。すなわち、英語をリーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別し、英語は月・水曜日に集約させた。

今後の課題としては I,II,III の教授内容・教材レベル・到達目標などの差異化について、必ずしも部会構成員全員のコンセンサスが得られていないことに対する検討である。この問題については、18年度は「科目検討 WG」を立ち上げたが、その中間報告を部会が受けて以後、同WGは活動を休止しているので、再度 WGを活動させる必要があると思われるところである。

2-2. また、外国語部会第 I と第 II とで、毎年入学式の翌日に、全新入生を対象として、外国語のオリエンテーションを実施し、入学後の語学の授業をより円滑に進めていくように努めている。

2-3. ネイティブ教員が担当する少人数受講生の特別編成クラス制(オーラル II として1年次後期に開講)は実施4年目に入り、当初17年度は1名の教員が担当したが、19年度は6名の特認教員が8クラスを担当し、全学部生を対象として8クラスを開講した。しかし、学部によってはクラスサイズの大小の差が顕著でありすぎ、20年度は9クラスに増やしたが、等しいサイズの特別編成クラスが開講できるような方法を模索中であるが、受講の資格として TOEIC650点を必要条件としているのも、学部によっては受講生の少ないクラスが生じる一因と思われる。

2-4. 19年度より、英語「アドバンスト科目」を国際コミュニケーションセンター所属の英語教員の担当で開始し、20年度は年間13コマを開講した。これは、高度な内容の授業を、英語文化領域・コミュニケーション英語領域・応用英語領域の3領域に分けて、2年次以上の学生に提供するもので、具体的には、English Project Work; Academic Writing; Preparation for TOEIC & TOEFL; Contemporary Academic Listening; Introduction to Ballads などである。

2-5. 特別単位認定制度:

1年次に TOEIC700 点を取得した学生には、単位認定を申請すれば、2年次前期の「リーディング III」および「オーラル III」の2単位(ともに「優」)を認定しているが、20年3月末の認定では、104名の申請者に対して「優」の単位を2単位認定した。リーディング部門、ヒアリング部門と合

わせて700点以上は1年次学生にとっては敷居が少々高すぎるとの反省から、平成21年度からは、各部門で350点以上を取得した学生に「優」を与えるという制度に移行する。

また、1年次において米ワシントン大学または豪メルボルン大学での3週間の海外語学研修を修めた学生にも、研修の成績に応じてオーラル III(1単位)を認めている。

### 3. 活動の状況(授業実施にあたっての工夫や問題点)

#### 3-1. ピア・レビュー

外国語部会第 II では、今年度ピア・レビューを実施し、その批評会には英語部会から部会長が参加したが、来年度は11月ごろに英語部会がピア・レビューを行うことが決まっている。

#### 3-2. クラスサイズ

英語は演習科目であるにもかかわらず、外国語第 II(未修)に比べて、クラスサイズが平均して大きく(特に医学部医学科や再履修生の多いクラス)、学生にとっては劣悪な教育環境のひとつとなっている。神戸大生にとっての英語の重要度には疑いをはさむ余地はないので、少人数クラスの実現にむけての大学当局の理解を求めたいところである。

#### 3-3. 教室環境

平成18年度からのカリキュラム改定に伴い、オーラル・クラスが増加したことにより(リーディング・クラスと同数になった)、マルチメディア対応の LL, CALL 室が不足してきており、LL 教室使用希望教員には抽選で対応しているというのが現状であり、しかも、LL 教室の機器類の老朽化がはなはだしい。しかし、CALL 室は、20年度6月現在、計5室までに増え、さらに21年度からは6室に増える予定であり、教室環境の改善が期待されが、21年度後期には K 棟が改修工事にはいり、LL・5教室は廃棄の見通しであり、同時に CALL 室の増加が期待されているとはいえ、劣悪なオーラル系語学教育の教室環境が続くので、その間普通教室のオーラル用教室化への改善が強く望まれる。

### 4. 今後の課題

教員による成績判定について学生に公平感を与えるために、一つの対応策として共通教材の導入があるが、平成20年度は、本学の英語教員に対して、この件についてのアンケート調査はおこなわなかった。次期の部会の幹事会には、部会長から個人的に引き継ぎをした。

年々神戸大学生の TOEIC の成績は上昇している。ようやく、TOEIC 特別単位認定制度や、学内での試験会場の設営、受験料の引き下げなどによる効果があらわれてきたものであろう。引き続き、学生の TOEIC 受験を支援していくことが部会として確認されている。

現状のように、英語の授業は、月曜日と水曜日のみ二日間だけというように固定された時間割が続くのであろうか。オーラル系の授業が増えたにもかかわらず、英語の授業日数が減ったためにオーラル系の授業では、主に教室の利用に関してたいへんな不便を感じており、また共通教育の英語の時間割の組みにくい状態が続いている。

神戸大学の共通教育の英語教育はどうあるべきかに関して、英語教員のあいだでコンセンサスに達していないと思われる。それは、英会話上達や、TOEIC などの得点アップのスキル向上を目指すべきなのか、あるいは、それは大学の英語の授業がめざすものではないのか。(一応、リーディングの授業では、TOEIC 教材を副教材として使用することは部会として認めているが、主教材としては認めていない。)この件や、共通教材の導入の是非や、各科目の教授内容・教材レベル・到達目標などについて部会で検討すべき時期にきていると思われる。

様式2(続き)

### 項目・観点ごとの記述

#### 基準5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになってい

るか。

(観点に係る状況)平成18年度から大幅なカリキュラム改定が行われ、リーディング、オーラルともに等しく重視する英語教育へと移行した。同時に、1年次において特別編成クラス(後期)やアドバンス・クラス(2年次以上の前期および後期)などの、より高度な語学教育を提供する科目も開講された。

根拠資料

- ・シラバス
- ・学則
- ・国際コミュニケーションセンターのパンフレット(2007年版、2008年版)

5-1-③: 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況)教科書の WEB 入力や、シラバスにより、学生の側からみて、教員の研究が授業内容に反映されているかどうかを知ることができる。

根拠資料

- ・シラバス
- ・教科書
- ・参考書
- ・配布プリントなど

5-1-⑤: 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況)予習を義務付けたり、毎回出席を必ずとったり、小テストを頻繁に実施したり、レポート提出を義務付けたりしている。

根拠資料

- ・出席簿
- ・小テスト答案
- ・提出レポート

5-2-①: 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。)

(観点に係る状況)平成20年度は実施しなかったが、年間何度かのピアレビューを実施することによって、教授法の改善に資するようになってきた。平成21年度には、英語部会はピア・レビューを実施する。

また、留学生および語学教員が毎日詰めるハブ室(2室)に本学生が行き、外国語で発信してくるよう課題をだしたり、指導をしている。

また、LL 教室や CALL 教室に限らず、一般教室においても、ビデオ・DVD 教材利用、インターネット利用の授業が実施されている。

根拠資料

- ・ピアレビュー記録
- ・国際コミュニケーションセンター・パンフレット(2007年版、2008年版)
- ・ハブ室勤務表
- ・ハブ室利用者名簿

5-2-③: 自主学习への配慮、基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

(観点に係る状況)オーラルの語学力の不足する学生には、休講の時間帯など、留学生の待機す

るハブ室に行き、オーラル力をつけるように指導している。

根拠資料

- ・ハブ室利用者名簿
- ・ハブ室教員・留学生勤務表
- ・国際コミュニケーションセンター・パンフレット(2007年版、2008年版)

5-3-②: 成績評価基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。  
(観点に係る状況)これは、教員によって成績評価基準がまちまちであるというのが現状である。この問題を解決するには、共通教材の開発や、GPA 制度の導入などが考えられる。

根拠資料

- ・出席簿
- ・期末試験答案
- ・小テスト答案
- ・シラバス
- ・各教員の自己点検・報告書

基準6 教育の成果

6-1-③: 授業評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

(観点に係る状況)各教員とも、学生からの評価・意見を、各自授業方法の改善のための参考としている。

根拠資料

- ・学生による授業評価
- ・学生による授業評価の集計表
- ・シラバス
- ・各教員の自己点検・報告書

基準7 学生支援等

7-1-②: 学習相談、助言(例えば、オフィスアワーの設定、電子メールの活用、担任制等が考えられる。)が適切に行われているか。

(観点に係る状況)英語教員のうち、国際コミュニケーションセンター所属の8名が週に一度1時間、語学学習の相談に応じられる態勢をとっている。また、国際コミュニケーションセンターの HP 上に各言語別に質問コーナーを設け、メールでの質問に応じている。英語部会の教員には、オフィス・アワーを設けている教員もおれば、あるいは、学生にメールアドレスや研究室番号を教え、相談や質問に応じることにしている。

根拠資料

- ・国際コミュニケーションセンターHP
- ・国際コミュニケーションセンター・パンフレット(2007年版、2008年版)
- ・ハブ室利用者名簿
- ・ハブ室教員・留学生勤務表
- ・シラバス